

2013. 第22号

富山大学医学部同窓会報



2013. 第22号

富山大学医学部同窓会報



C O N T E N T S

4. 地域医療の医師確保対策2012」への本学の取り組みと、
医学部研究棟耐震改修工事費支援のお願い 医学部長 村口 篤
5. 変わるものと変わらないもの 会長 高田良久
7. 「卒業生だより」の発刊をつづけて
附属病院専門医養成支援センター コーディネーター 宮 一 志 (平成11年卒)
8. 卒業生だより
卒業生は今？
富山大学の今...
16. 富山大学医学部同窓会Facebookのご紹介 耳鼻咽喉科 武田精一
17. 〈特別寄稿〉
国際保健のフィールドへ
～国立保健医療科学院での研修を通して～
附属病院臨床研修部卒後臨床研修センター 臨床研修医 中曾根泰人
22. 優秀論文賞を受賞して
～視床Vo核凝固術で書字改善が見られた書癱の3症例～
脳神経外科 旭 雄士 (医学科 平成8年卒)
23. 富山大学・富山医科薬科大学の同窓会報に寄せて
～大学の現状と課題～
医学部整形外科 准教授
附属病院臨床研修医センター 副センター長 川口善治 (医学科 昭和63年卒)
25. 臨床教室での研究の勧め 第一内科 診療教授 (講師) 薄井 勲
28. 〈卒業生教授就任挨拶〉
教授就任挨拶 耳鼻咽喉科頭頸部外科学 將積日出夫 (医学科 昭和57年卒)
29. 教授就任挨拶
～南方熊楠の故郷に赴任して～
和歌山県立医科大学・人体病理学 村田晋一 (医学科 昭和61年卒)
31. 〈新任教授就任挨拶〉
新任教授挨拶 病理診断学 井村穰二
32. 新任教授挨拶 脳神経外科 黒田 敏
33. 新任教授挨拶 解剖学 一條裕之
34. 富山大学新任挨拶 感染予防医学 山本善裕
-

染色工芸家。太平洋美術展・新人賞(1982年)、松吉賞(1984年)、太平洋美術会賞(1998年)受賞。各地工芸画廊をはじめ、日本橋高島屋(東京)、現代工芸藤野屋(栃木県佐野市)などで個展を開催している。また、1994年とちぎの美術女流作家100人展にも選ばれる。1999年銀座松屋にて個展を開く。いずれも好評を博す。栃木[蔵の街]音楽祭協力委員として地域文化活動にも貢献。縁あって本同窓会誌の表紙絵を1997年より依頼している。栃木県岩舟町在住。

-
- 〈退官寄稿〉
- 35 . 富山大学の7年9か月を振り返って 附属病院外科病理学 福岡順也
- 〈定年退官寄稿〉
- 37 . 富山大学小児科教授としての17年 小児科 宮脇利男
- 38 . 放射線医学の進歩と福島原発事故 放射線診断・治療学 瀬戸 光
- 40 . 退官にあたって 行動科学 福田正治
- 42 . 富山大学の退任にあたって 富山大学 名誉教授 渡辺行雄
- 43 . 第64回西日本医科学生総合体育大会
- 44 . ゴルフ部活動紹介及び第64回西日本医学体育大会
ゴルフ部門のご報告 男子部長 富岡義仁 (医学科3年)
女子部長 鈴木絢子 (医学科3年)
- 〈訃報〉
- 46 . 成毛君を偲んで 中嶋 悠 (医学科6年)
山岳部 佐野寿郎 (医学科6年)
- 48 . 平成24年度富山大学附属病院関連病院長懇談会議事要旨
- 49 . 平成24年度第31回富山大学医学部同窓会総会 議事録
- 54 . 富山大学医学部同窓会プライバシーポリシー
- 55 . 平成23年度会計報告・平成24年度収支予算・平成25年度収支予算案
- 57 . 平成23年行事報告・平成24年行事・平成25年行事予定
- 58 . 職掌分担・評議員一覧
- 60 . 医学部人事消息
- 61 . 編集後記
- 63 . 卒業生からのメッセージ
- 67 . 富山大学医学部同窓会オンライン名簿利用手順

●会計からのお知らせ



「地域医療の医師確保対策2012」への本学の取り組みと、 医学部研究棟耐震改修工事費支援のお願い

医学部長 村口 篤

医学部同窓会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。早いもので、今年も残すところ四週間ばかりとなりました。本日は快晴に恵まれ、研究室の窓から白銀の立山連峰がくっきりと遠望できますが、厳しい冬の到来は目の感があります(執筆日にて)。

さて、我が国の医療と国立大学医学部を取り巻く状況は目まぐるしく変貌しており、2012年9月10日に文部科学省・厚生労働省から、「地域医療の医師確保対策2012」というタイトルでマスコミへの通知が出されました。その基本的な考え方は、地域医療の確保のために、文部科学省・厚生労働省が密接に連携し、医師養成の現状や高齢化等の社会構造の変化を踏まえた取組みを行う。このため、医師のキャリア形成支援という視点から、医師の偏在解消への取組み、医師が活躍し続ける環境整備および医療需要の変化に対応した人材育成を行うというものです。具体的に取り組む事項として、1)医師養成対策、2)医師確保のための環境整備、3)医師が生涯にわたり研鑽を積み、医療の現場で活躍できるための環境整備、4)超高齢化社会等の医療需要に対応した人材育成を行うことが明記されております。

富山大学医学部の取り組みとしては、上記1)、2)に関しては、富山県が卒業後一定期間(9年間)地域医療に従事することを返還免除の条件とする奨学金を設定する「特別枠」として10名の学生募集、さらに、地域医療を担う意欲のある(県内高校で現役の)受験生を確保する「地域枠」として15名の学生募集をしています。これら特別枠・地域枠入学の学生のキャリアパスのために、「キャリアパス創造センター」を設置し、「医学教育学講座」、「地域医療支援学講座(寄付講座)」、「大学附属病院総合診療科・病院研修センター」、「専門医養成センター」が中心となり、入学時から卒前研修・卒後研修、専門医取得までの地域医療のためのシームレスなキャリア・プロフェッショナル教育に力を入れております。上記3)、4)についても、現状を分析しつつ可能な限り実行に移し、これからの地域医療を担う意欲と能力をもつ医師の養成・確保に尽力するつもりです。また、看護学科では、県民にとって最良の看護師、保健師、助産師を育成すべく、医学部教職員一同さらに精勤する所存であります。

さて、卒業生の皆様にご協力のお願ひがあります。2011年から薬学部研究棟の耐震改修工事が始まり、杉谷キャンパスは工事ラッシュに入っております。国立大学法人の施設の耐震改修工事の費用は、本来、国(文科省)が全額負担すべきものですが、一般の未曾有の大不況、東日本大震災の影響等により、各大学の自助努力金に頼らざるを得ない状況にあります。薬学部研究棟の耐震改修工事では、薬学部の拠出金がおおよそ5000万円となり、後援会を中心に薬学部教員一丸となり支援金を集めております。医学部の耐震改修工事は、国の2013年度予算で認可される見通しで、その工事のために、医学部には1億円以上の自助努力金が課せられると推定されます。医学部の対応としては、医学部後援会のお力添えを頂き、来年度から寄付金募集を開始する予定です。医学部同窓会の皆様には、厳しい経済状況の中、誠に恐縮ではありますが、現状をどうかご理解頂き、何卒、お力添えならびにご支援を頂きますようお願い申し上げます(寄付のご依頼については改めてご連絡いたします)。

変わるものと変わらないもの

会長 高田 良久

初売りの話

仙台で面白い話を聞いた。仙台藩の初代藩主伊達政宗(1567年永禄10年-1636年寛永13年)の頃から続く新春恒例初売りの話である。

伊達政宗は仙台藩とスペインの通商交渉(太平洋貿易)を狙い、徳川家康の許しを得て、家臣の支倉常長(1571年元亀元年-1622年元和8年)をスペイン・ローマに派遣した(慶長の遣欧使節、1613年慶長18年)人だ。仙台では商業が興隆で、「初売り」もそんな中から生まれた習慣、伝統行事なのかもしれない。

午前2時、3時から並ぶ人、7~8万円の予算で福島から来る人^{*1}、買う方の意気込みも相当なものだが、売る方も、豪華な景品を入れたり、2割増の商品券を用意したり、とたいそう力が入っている。

もっとも豪華景品や破格の特典は、わが国では景品法という法律に抵触するそう。しかし公正取引委員会は、旧仙台藩領内で見られる「初売り」を伝統行事とみなし、三日間以内の期限付きで認めているという。全国展開する大型店も、他地域では禁じられている景品や特典を、仙台の三日間に限ってはつけるのだそう。今で言う規制緩和の特区だろう。

遣欧使節といい初売りといい、仙台には特別な力がある。

その「仙台初売り」も開始日をめぐっては紆余曲折があったようだ。以前はどの店も新年初の営業日と「仙台初売り」の開始日は同じ日、つまり、江戸時代から1月2日だったそうだが、1950年代には商工会議所の主導で4日となったり、3日となったり、全国資本が参入してくると、元旦初売りや伝統の2日初売りが共存した時期もあったそう。しかし現在は、大型店もたとえ元旦から営業してもその日は通常営業で、「初売り」は2日から、と2日開催に揃ってきているという。

元旦と2日、この違いは何だろう。

我が祖母は元旦には決してお年玉をくれなかった。「一年の計は元旦にあり。元旦にお金を出すと、お金の出る年になってしまう」というのが理由だったようだが、もらう立場の「進歩的な若者」だった当時の私は「年寄り迷信好きだ」と

思っていた。しかし、出す立場の壮年になってみると、祖母の気持ちもわかる気がする。迷信好きの年寄りになったから？ そうかもしれないが、「正月」がお年玉と年賀状だけではないことがわかってきたからだと思う。

国の元首(とあえていうが)の天皇が、手ずから宮中で田植えをなさるわが国は、農耕こそ最重要事だったはずだ。だから、その年の豊穰を司る歳神様をお迎える正月は最も優先すべき大切な行事だったに違いない。元旦がそのための特別な日であって何の不思議、不合理があろう。「仙台初売り」が2日に落ち着こうとする理由は、そうした地域の、民族の記憶にあるのではないだろうか。

2013年1月4日のニュースによれば、大手百貨店の初売りは、元旦営業したそごう・西武だけが前年比1.5倍の売り上げ増で、例年通り2日からだった三越伊勢丹、大丸松坂屋、高島屋とも、マイナスだったという^{※2}。「仙台初売り」はこの後どうなるだろう。

農耕が最重要事ではなくなったかに見える現代のわが国においては、元旦の意義さえ変わろうとしているかのようだ。そこに不気味な動揺と不安を感じるのは私だけだろうか。

「仙台初売り」の豪華景品は時代とともにどんどん変わってきたに違いない。しかし、2日を開始日とする習慣や、国法の例外となってしまう特別さは、今後も変わらないのではないか。私はそこに地域と歴史にしっかりと根を張った落ち着きとやすらぎ、そして力強さを感じる。それは、未曾有の大震災からの復興をも予感させる、信じさせる力強さである。

移り変わる時のなかに、変わらぬ営みのある安心を思う。

富山医科薬科大学の生化学第一講座の初代教授だった岡本宏先生は東北大学の教授となって仙台に移られた。我が友、西澤幹雄、沢丞といった面々も先生を慕って仙台に赴いた。

仙台の日本糖尿病学会年次学術集会で、三十年ぶりに先生にご挨拶申し上げたところ、「教育は大事だ」と繰り返しおっしゃって固く握手をしてくださった。

仙台の富山陣は、「初売り」に行っただろうか。それとも、変わらず、研究に打ち込んでいたのだろうか。

※1 河北新報 2013年1月3日19面

※2 MSN産経ニュース 2013年1月4日

「卒業生だより」の発刊をつづけて

附属病院専門医養成支援センター コーディネーター 宮 一志（平成11年卒）

私は平成11年に富山医科薬科大学を卒業後、小児科学講座で小児科医として研修をさせていただきました。しかし、自分自身がいかに能力をあげていっても、人手が足りないことによって子どもたちにできない、子どもたちに届かないという現状を感じ、いかに富山の小児科医を増やすか、自分なりに模索しつつ、学生の勧誘、小児科としてのイベントの企画などを行っておりました。その甲斐もあってか、入局してもらえ小児科医が増えてきたようにも思えましたが、自分のやっていることが本当に意味のあることなのか漠然とした不安を感じておりました。

そのような折、いろいろなご縁をいただき、平成22年度より専門医養成支援センターのコーディネーターという役割をいただくこととなりました。小児科という小さい枠をこえて、病院全体、大学全体として研修医の支援を考えるという、私にとっては初めてで、そして大きな経験をさせていただくことができました。その中でも非常に強く考えさせられたことは、広報の重要性でした。いかに素晴らしい企画をしても、広報がうまくいかないと参加者が集まらない。伝わっていないければ、何もやっていないのと一緒であるという事実は反省とともに非常に大きな経験となりました。

もう一つの重要な体験はひととのつながりの大切さを知ったことです。専門医養成支援センターの仕事をさせていただく中で、他科の先生との交流、事務の方々との関わりを通して、自分の視野が広がっていくことを感じ、そこで得ることのできた体験が何も関係ないようでも、自分のもともとの仕事に生きてくる。当たり前のことですが、改めて実感することができました。そのような人とのつながりの大切さを感じている中、戸辺センター長より「卒業生だより」の企画をいただきました。卒業生と研修医や学生の交流を深めることを目的として、卒業生は今どんな活躍をしているのかなど、メッセージをいただいて冊子を作成するという企画です。冊子の企画・編集作業は勿論初めてで手探りの状態で、同窓会の評議員の皆様にご電話や郵送でほとんど無理矢理にメッセージをお願いし、何とか創刊号を発刊することができました。メッセージをいただくのは大変苦勞いたしました。学生や研修医にはたいへん好意的に読んでいただくことができました。それに勢いづいて、年2回の発刊を続けており、今後も継続していきたいと思っていた折、残念ながら専門医養成支援センターの事業は平成24年度をもって終了することとなってしまいました。そのような状況を同窓会の理事会にお伝えしたところ、「卒業生だより」の発刊を同窓会が後援していただけることになりました。さらに医学科学生も「卒業生だより」の編集に協力していただけることになり、ますます充実した「卒業生だより」を発刊できそうです。

今後は同窓会の後援のもと、私、そして卒業生だより制作委員会の学生とともに、もっともっと充実した「卒業生だより」を発刊していきたいと思っております。つきましては今後、先生方にもメッセージ依頼がありますが、快くご寄稿いただければ大変有難く存じます。ご協力の程、宜しくお願いいたします。

